

## 包括的自己実現概念の創設 研究1

－ カントの自律、ヘーゲルの社会化、スウェーデンの福祉国家の理論研究から－

○ スーテル学院大学大学院付属包括的臨床死生学研究so:清重哲男 (1709)

キーワード: 自己実現・福祉理論・政治哲学

### 1. 研究目的

自己実現に関する概念は、カントの意志の自律した人格の完成を希求する概念から、ヘーゲルの協同体の「相互承認」に至る精神の形成概念に進化してきた。本研究は、筆者が開発した自己実現概念に焦点を当て、これまでの研究を総括し、包括的で普遍性のある自己実現概念を再構築することを目的としている。

### 2. 研究の視点および方法

本稿の研究視点は、個の視点から、外に出て他者の世界に視点を移し、家族、市民社会、国家の各共同体で生きる個の自己実現概念の研究である。国家共同体としてスウェーデンの福祉国家を取り上げた。

<研究の方法> 国会図書館のNDL-OPACに登録された先行研究を検索し、1994年以降の自己実現に関する文献を抽出した。過去5年間に発表した学会報告を総括し、先行研究を再分析し、新たに先行研究を追加した。ヘーゲルの研究は市立図書館の文献を参考にした。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、個人情報に倫理的配慮をしています。本研究で引用・参考とした先行研究文献等は、著作権の保護に従い、研究目的以外に使用しないことを誓約します。

### 4. 研究結果

4-1 カントの概念 自己実現とは「自己」を実現することである。まず、実現すべき自己を規定しなければならない。カントは、自己について「行為を行う主体である人間が『自己』である」と述べている(図1参照)。行為について、カントは「意志行為」と「外的な動作」の2つを述べている。特に、人間の行為の起点は意志行為である。カントは、意欲の大きさや、意志の善さ、性向、などの「内的な意志の働き」を意志行為の特性として論述している。カントは、人格と行為について「自分の人格のうちにも、他の誰もの人格のうちにもある「人間性」を決して手段としてだけ必要とするのではなく、いつでも同時に目的として必要とするように行なさい。」と論じている

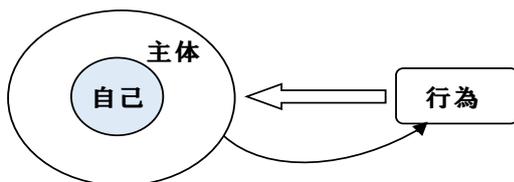


図1 自己と行為

(Kant=2000:65)。カントは、「自律とは、別の外的原因から独立していること、つまり、自由

であることに他ならない。」と論じている(Kant=2000:170)。実現すべき自己とは、「本人の意志が自由であり、主体の意志が自律に基づき行為できる自己」をいう。その自己の希求が自己の実現である。自己の実現とは、人間の意志が自律することを求めて歩むことで

あり、外的要因から自由になることである。(千葉 2006:35)。

4-2 ヘーゲルの概念 ヘーゲルは、主著「精神現象学」の、C章の「精神的な自己意識の自己実現」の項で精神を「精神として、まだ自己を実現していないので、そこにあるのは個としての精神にすぎない。個としてある自分を二重化し、自分にむきあうもう一人の自分を作り出し、自分を対称世界との統一を意識する、という目的をもって目の前の世界に乗り出していく実践的な意識である。」と説明している (Hegel=1998:240) (図2参照)。ヘーゲルは理性の項で「意識は、意識の運動のなかで、個の存在が完全な発展を遂げ、・・・自分の外に出て反対の極へと向かい、そこで独立の存在を獲得し、・・・個が克服されて共同性へと至る・・・」と論じている (Hegel=1998:160)。ヘーゲルによれば、「自己意識した

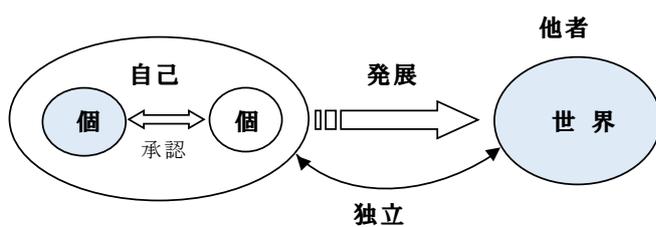


図2 ヘーゲルの理性の自己実現

理性の自己実現とは、他人の自立を認め、そこに他人との完全な統一を実感すること、あるいは、私を否定する力をもつ他人の自由な存在を、目の前の物としてとらえ、それをわたしの自立存在として対象化対することにある。」と述べて

いる。ヘーゲルは人間の内に複数の承認要求の存在を取り上げ、「家族」、「市民社会」、「国家」の三つの共同体の社会的な承認形式を提示している。人間は、三つの領域での承認が必要であるとされている(千葉 2006:31)。

4-3 他者の概念 ホーネットは、「法的に承認された自律という社会的な前提によつての

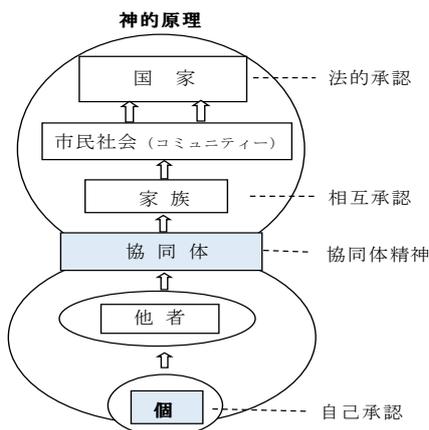


図3 個の発展と自己実現

み、自分の願望を吟味する関係の中で、自分自身と向き合う人格として自分をとらえることができる。法的に保障された自律は自己実現の社会的条件」であり (千葉 2006:35)、また、国家の私的な自己の実現へのプロセスの承認と諸条件の提供を論じている。フィヒテの哲学は、自我の自律を原理とし、自己実現の不可欠の成立要件として共同体形成を位置づけている点で、ヘーゲルの思想を継承しているといえる(池田 1998:41)。

スウェーデンのゼッターバーグは、政府部門は、福祉の目標である「自己実現」のメカニズムの構築のために個人と家族、社会の総合システムの構築が必要であると論じている(木村 2000:8)。(図3参照)

5. 考察 カントの内面的な意志の自由な自律した人格を出発点として、ヘーゲルの外世界の共同体形成へと自己実現の概念は進展している。ヘーゲルの承認形式は、ゼッターバーグの福祉国家の個人の自己実現への条件支援に影響を与えてきている。宗教性と地球的視野を加え、包括的な自己実現概念の普遍性の研究を今後の課題としたい。

— 完 —